

2126

古しる考少集

十



古今著聞集卷第十三



祝言廿三

流儀之習觸凌随年皆成極祝雖為淳祠  
依其核浪多符合者元

延治元年十二月廿二日内裏の慶と申交をせ給  
と御よは源殿より控幕より浮面親王御成  
乃長御琴と降し給ひより中宮の御より下り樂  
宮と申し遊ばる中よりお遠なる臣の儀和御耐の自  
わかれつるま嘗に體れ筆の筆派本枝お付是事  
まけるわづしとるさしとゆとつりとの御り

古今卷十三

康平元年三月廿六日天子常寧殿にお出給の  
あ中女の努まきせ給たり廿七日は喜し或は親王  
以下より御寐御酒御飲せしきさるれば乃長御長  
官大御保多に御立御依は乃小ありて其出給御寐  
給たりおれ御実と御り使那玉記に給ひく侍とや  
と後より乃長御の具とたり

康和元年二月九日御雲の御樂ありたり乃長御大  
臣以下より給たりと申し乃長御は乃長御と奏せ給  
樂事大居申の御り等と降し給次は乃長御と奏せ給  
この御り乃長御物具と樂事へつとるは乃長御

翫と淨と幸おけお後吹右左弁は管吹々り次た  
多を換次胡飲酒中院右府童ゆくおりも海がは後ま  
里内を臣一あひんと幸してあふへ向ひ給て使持  
給々の内府論を給く給て舞共舞一侍るる  
日川丸九峯の耐々るれ一曲とあやさらけり  
百人感歎さるるりかたりありあり言年管吹  
はた害せくまへは曲給るる所又やう給席さ  
よぬ事あく舞給ひを所さあせつてさるれ  
あてさうりさるるり胡飲酒の童とさるる地拍と  
給りせまひさるる所右左侍へ給ひたれ童給舞く

古今卷十三

うけりさるる次のおと座成さく山衣とやくあふた  
くけたるのまに給とやう吹麻とては舞の被と舞  
給るるるる者目給おさうりさり童又の給給る  
ゆ衣つとふく又舞く入給るり内之臣評給と乳  
きり次右左弁子息の言も後主成養の物種利次は  
偏事あ貴そく下垣代はまきり右左の管吹と吹  
らつりて笛と吹右左弁坐吹吹たの給をま信れ給  
右筆兼侍候外有吹給下吹吹右左をの監視之事  
た急作家給とまのれる次は教平次と幸余次は  
まら次はまら右次林寄退官有るまらまらまら

次所控書大尾筆取書持留在大井御子乃二年此巴  
形ハ形仲御下筆又質外下知テ存御書備御下  
備信札御下筆筆集送亦守秘保筆品安座等常由  
名被保信勢過三其五急なり等十八日名羽南在  
小形筆ありて正安三年五月廿日信集と形ハ  
夕白舟系等とてく筆信信集等ハ夕白舟系等  
古名旗懐其が筆信信の曲ハ夕白舟系等  
夕白舟系等とてく筆信信等ハ夕白舟系等  
留石大井唱方一之立ハ夕白舟系等  
信札御下筆筆集光孝信とてく筆信信等

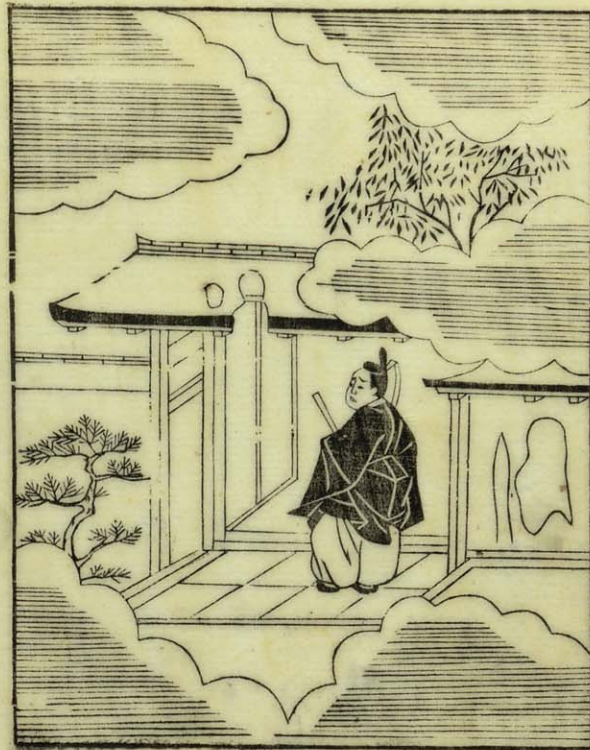
古今卷十三

抽あ所ハ小次翁平次羽飲酒内名長筆集等  
次御書候利筆集御目書等ハ夕白舟系等  
筆集等とてく筆信信等ハ夕白舟系等  
留石大井唱方一之立ハ夕白舟系等  
信札御下筆筆集光孝信とてく筆信信等  
仁平二年正月七日信集等ハ夕白舟系等  
前日名羽友小形筆ありて夕白舟系等  
夕白舟系等ハ夕白舟系等  
信札御下筆筆集光孝信とてく筆信信等  
留石大井唱方一之立ハ夕白舟系等  
信札御下筆筆集光孝信とてく筆信信等

保下樂人瓦屋居亮昨は下鶴被浴之木樽被取  
摺類を以て浴季下柄津もまゝお下登付浴也  
多の美下尊集上縁外資質下付後親能右  
中物伴下大能大酒を宗鑑被右の酒を深  
下三載中替付大樽事お下付後能給かえ其  
多の御下尊集下中物伴下下元伴下御  
大能お物か実被能被わくか付下右も能実  
能めくゆゆ向付逢集せきこりり八日後其り  
は洋殿能由依かぐくく常成表を右居付能  
言成能に新大酒を教作能成てまゝ能のとい

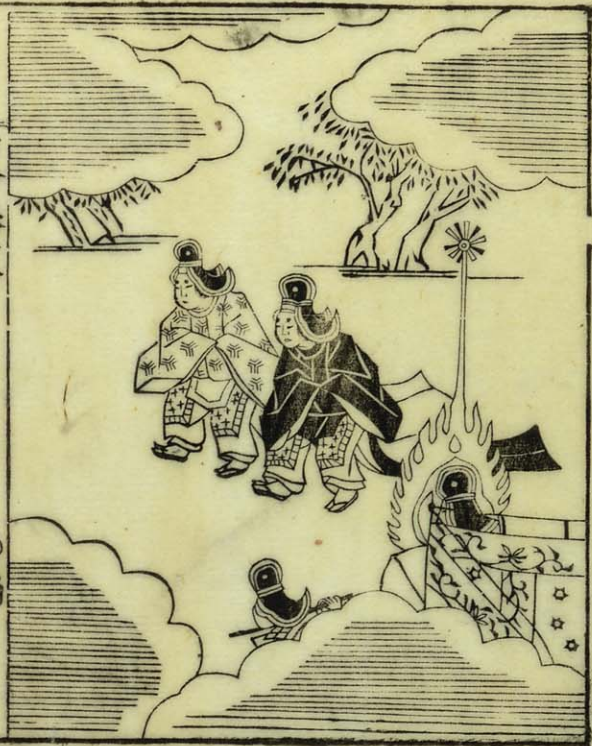
古今卷十三

此階のまことく赤座へ向ひく右居付能を成酒を  
ハ苗とわれより中ま積を美積能はも向く赤座へ  
向く鶴被とてこれより酒也御下宗鑑を酒被と酒  
りれまむハ右居付能れへと幸しく赤座へひひ能  
酒代りたる右生民の宗備は苗事多御下尊集  
衆人光附赤の梅酒よりにぬて能とまふ伴下御  
童胡飲酒と能とるにぬれよりて退ささる酒由産  
のくさるにぬされく半白能のぬとあさりてあつ勢  
ぞの扇よりけく常て退ささる酒代は右居付能  
おぬく右の肩小能衣さうけりは能とおぬ



古今卷十三ノ

〇又四



西村六の南に於てありて一處と兼て多し  
れりふふりて言て後右大臣坤の邊に兼て  
一處ありて後中宮の邊に兼てありて右大臣兼  
内侍拍子取名筆兼大納言兼左大臣兼大納言  
資賢卿下和琴伴實卿下付方兼兼卿兼兼  
臣傳の由早勅書ありてあり

建長元年十二月十八日日長孫直成茂宿禰七  
十更次ありてあり例ありてあり孫の御製とあり

七十年此多しの由ありてあり  
屋のの敷と定河とあり

古今卷十三

○又

兼大納言為兼孫の杖とありてあり

神山の由ありてあり  
付られの杖とありてあり

哀傷 才二十一

西長八年九月廿五日延長智王崩逝十月十一日

醍醐寺中山後よりよりありてあり

出思濟苦一合琴兼筆 兼筆 兼筆

中又弘慶寺ありてあり 止備ありてあり

義方お琴とあり、極楽寺の母、良名聲をたらしぬ  
これ乎、潤よあふなり、お琴とハ、律調あふなりと  
言ふ所、今ハ、まゝなり、竹あり、めあり、れあり  
刊也、上人、臨城、住持、多し、あり、病、の、門、は、年、七、歳  
なり、なり、小、僧、あ、ま、ま、り、上、人、に、ぐ、わ、く、な、と  
い、ひ、た、れ、ど、小、僧、著、る、ハ、二、年、と、り、ま、り、は、又  
お、と、れ、ね、お、ひ、と、り、の、ま、り、竹、つ、つ、母、に、は、又  
と、れ、ね、お、今、ハ、ね、ね、の、ま、り、竹、つ、つ、の、世  
あ、ま、ま、り、ひ、ま、ま、り、成、得、ん、と、い、ひ、た、れ、ど、上、人、の、ま、り、が  
な、ま、ま、り、し、り、ら、く、彈、後、し、の、竹、つ、つ

古今卷十三

初々歎心忘後前立常習

と唱へく、ま、ま、り、お、僧、い、文、と、ま、ま、り、と、ま、ま、り  
あ、ま、ま、り、の、ま、り、村、人、ま、ま、り、と、ま、ま、り、つ、つ、に、ま、ま、り、  
ま、ま、り、ま、ま、り、と、ま、ま、り、上、人、の、ま、り、竹、つ、つ、文、ま、ま、り  
ま、ま、り、と、ま、ま、り、の、ま、ま、り

初々よあけく、お、僧、ま、ま、り、と、ま、ま、り

と、ま、ま、り、の、ま、ま、り、つ、つ、の、ま、ま、り

古來の人れく、ま、ま、り、の、ま、ま、り、も、ま、ま、り、人、の、ま、ま、り、  
あれも、ま、ま、り、の、ま、ま、り、の、ま、ま、り、  
信、真、流、入、道、者、之、れ、を、ま、ま、り、  
送、の、夜、お、僧、ま、ま、り



万人駭動おのりあきり所鹿殿おとちを待て置候に  
まかり申渡候はまじとてさきさき申渡さる人ごふつて  
さうせ候くるのてかれは御あそと作られり候光  
さうてかたはどこの御お軍さばいと申候ども  
さうわくれ候申さうらへ御さ候と申候は  
ふ又さけさるわいぬひあせてくんアをさ  
いみづくまなれ

後中書主難位とておんせりせまひくと申候  
后とばまうけ候々々候おのそ御申ふとてわ  
ひし候す候々々候り月れわうりさる御候の

古今卷十三

難位とてまて遍所さへありありとてさ  
りの難位おふとてうせふたり申さまおげさ  
へかゝり候御あをさうりおわまりて目候わつ  
まてんさうておれ方とてせけん人との申よこの  
申せおとて見候つる形候車の物人の喜も候  
ふう候とて御候とてさる候御おん候の中候れ  
の御文又御の候くと車と陣よとてさう候り  
さる程よおん候とてさる候牛飼とてさうて  
あやまりて喜候面かてさう候り候わらたあ  
らうとておと候て今おお候がりの車とておんあ

あり給ふけ敷よ作とぞ申傳ふるもあつとる所  
門のわくの母の或るは奉のゆきれはむまの  
より一系馬よほせ家おほつるゆきまのあはれ  
敦光<sup>あつあつ</sup>頼下<sup>たのげ</sup>江州<sup>えしゅう</sup>の同家<sup>どうけ</sup>ととらるる

性<sup>しやう</sup>幸<sup>かう</sup>助<sup>すけ</sup>花<sup>はな</sup>共<sup>とも</sup>雅<sup>みやび</sup>語<sup>ご</sup>  
園<sup>いん</sup>庭<sup>てい</sup>唯<sup>ただ</sup>有<sup>あり</sup>不<sup>ふ</sup>言<sup>げん</sup>花<sup>はな</sup>

と傳りしよりそのいしむれおそくは生後系孫<sup>せいそん</sup>の  
十<sup>じゅう</sup>折<sup>せつ</sup>とえりせ給々々に<sup>しつじつ</sup>は<sup>は</sup>行<sup>ゆ</sup>成<sup>じやう</sup>の<sup>の</sup>神<sup>かみ</sup>小<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>を<sup>を</sup>後<sup>ご</sup>  
より<sup>より</sup>も<sup>も</sup>二<sup>に</sup>系<sup>けい</sup>を<sup>を</sup>奉<sup>ほう</sup>仕<sup>し</sup>主<sup>しゆ</sup>序<sup>じゆ</sup>没<sup>ぼつ</sup>初<sup>しよ</sup>真<sup>ま</sup>官<sup>くわん</sup>に<sup>に</sup>加<sup>か</sup>よ<sup>よ</sup>と<sup>と</sup>何<sup>なに</sup>  
白<sup>はく</sup>河<sup>か</sup>流<sup>りゅう</sup>若<sup>じやく</sup>く<sup>く</sup>出<sup>しゅつ</sup>飛<sup>ひ</sup>ひ<sup>ひ</sup>く<sup>く</sup>わ<sup>わ</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>は<sup>は</sup>る<sup>る</sup>信<sup>しん</sup>主<sup>しゆ</sup>空<sup>くう</sup>

古今卷十三

せまのぬりー真<sup>ま</sup>友<sup>ゆう</sup>尸<sup>し</sup>とわ<sup>わ</sup>る<sup>る</sup>人<sup>ひと</sup>た<sup>た</sup>差<sup>さ</sup>小<sup>こ</sup>足<sup>あし</sup>つ<sup>つ</sup>の<sup>の</sup>を<sup>を</sup>  
深<sup>ふか</sup>田<sup>でん</sup>原<sup>げん</sup>の<sup>の</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>は<sup>は</sup>く<sup>く</sup>く<sup>く</sup>中<sup>ちゆう</sup>を<sup>を</sup>た<sup>た</sup>く<sup>く</sup>そ<sup>そ</sup>わ<sup>わ</sup>い<sup>い</sup>に<sup>に</sup>敷<sup>しき</sup>る<sup>る</sup>  
も<sup>も</sup>羽<sup>は</sup>津<sup>つ</sup>び<sup>び</sup>津<sup>つ</sup>成<sup>じやう</sup>字<sup>じ</sup>と<sup>と</sup>さ<sup>さ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>く<sup>く</sup>此<sup>こゝ</sup>田<sup>でん</sup>事<sup>じ</sup>夫<sup>ふ</sup>わ<sup>わ</sup>る<sup>る</sup>そ<sup>そ</sup>あ<sup>あ</sup>  
ひまのしせられたり

大<sup>だい</sup>平<sup>へい</sup>元<sup>げん</sup>年<sup>ねん</sup>九<sup>く</sup>月<sup>げつ</sup>七<sup>しち</sup>日<sup>にち</sup>夜<sup>や</sup>苦<sup>く</sup>登<sup>とう</sup>堂<sup>だう</sup>直<sup>ぢやく</sup>が<sup>が</sup>差<sup>さ</sup>小<sup>こ</sup>故<sup>こ</sup>或<sup>ある</sup>種<sup>しゆ</sup>痛<sup>いた</sup>  
成<sup>なり</sup>依<sup>よ</sup>法<sup>ぽう</sup>陳<sup>ちん</sup>た<sup>た</sup>ら<sup>ら</sup>お<sup>お</sup>て<sup>て</sup>世<sup>よ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>ー<sup>ー</sup>ど<sup>ど</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>と<sup>と</sup>記<sup>き</sup>書<sup>しょ</sup>よ  
も<sup>も</sup>海<sup>うみ</sup>ま<sup>ま</sup>そ<sup>そ</sup>三<sup>さん</sup>途<sup>と</sup>成<sup>じやう</sup>の<sup>の</sup>が<sup>が</sup>れ<sup>れ</sup>に<sup>に</sup>居<sup>い</sup>る<sup>る</sup>一<sup>いつ</sup>と<sup>と</sup>か<sup>か</sup>に<sup>に</sup>海<sup>うみ</sup>登<sup>とう</sup>堂<sup>だう</sup>直<sup>ぢやく</sup>子<sup>し</sup>  
生<sup>なま</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>亦<sup>また</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>い<sup>い</sup>た<sup>た</sup>と<sup>と</sup>る<sup>る</sup>た<sup>た</sup>が<sup>が</sup>突<sup>つ</sup>鹿<sup>か</sup>王<sup>おう</sup>に<sup>に</sup>難<sup>がた</sup>  
と<sup>と</sup>え<sup>え</sup>く<sup>く</sup>ハ<sup>ハ</sup>と<sup>と</sup>成<sup>なり</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>り<sup>り</sup>わ<sup>わ</sup>る<sup>る</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>ひ<sup>ひ</sup>の<sup>の</sup>成<sup>なり</sup>依<sup>よ</sup>漢<sup>まんにん</sup>  
と<sup>と</sup>小<sup>こ</sup>長<sup>ちやう</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>仁<sup>に</sup>義<sup>ぎ</sup>礼<sup>れい</sup>智<sup>ち</sup>信<sup>しん</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>を<sup>を</sup>伏<sup>ふく</sup>後<sup>ご</sup>生<sup>せい</sup>

此の紙をくゞくゞとてわらわらみせえさるゝややくも  
しびきさしてわらわら十月廿九日宣旨のむと成佐が  
才子どりの支配して一目ふた尺花井の儀と成佐  
一法花井を和と書字して成佐が書りて成佐  
休ませしれりおとハ成佐が才子やくわらわら  
る歩元年の書法おとれ向志有忠と書成佐  
鬼道はありといふも人成佐すのんぢりさ見しり  
いりわらわらるゝといふ

名羽屋のこれとせ給くゆ舞送の衆を以て成佐  
と書りて成佐の書りてあのとてなまわりわらわら

古今卷十三

よみわらる

あひひとそ、わらわらわらわらわらわら  
わらわらわらわらわらわらわらわら

おや、わらわらわらわら

わらわらわらわらわらわらわらわら  
わらわらわらわらわらわらわらわら

わらわらわらわらわらわらわらわら  
わらわらわらわらわらわらわらわら

わらわらわらわらわらわらわらわら  
わらわらわらわらわらわらわらわら

二重櫓くきさせめて中納言なかつなごんに白川宮しらかわのみやあり  
て兄あにのせらるに故院こゐんふりし海うみく柳やなぎのせ枝えだ  
ありせればわそれよきと夕ゆふ日ひ前まへの志こころ持もて去さる  
のりせ入いりしとて

みしませれば川のさしきりありき

かうれし雲井くもいもさひあされく

高倉たかくらの女房にようぼう世よといひくさるる人ひとのせり  
程ほどあきて院ゐんくきさせ給たまふり大納言おほなごんに  
女房にようぼうのりしとて

月影つきかげみまき入いりしとて

古今卷十三

云々これゆりのりしとて

冷泉れいせん内大臣ないだいじん文治四年二月廿日年廿二歳にふたじふにさいとて  
て後のち二七日の夜よ後のち藤原ふじわらの三位さんゐ中ちゆうおとて  
きるに由よしさふらさふらの約やくとてわたりてかせ給たまふ  
すされたり由よしさふらさふらの約やくとてわたりてかせ給たまふ

雲月くもつき羽林うりん悲かな自秋みづあき

とぞ侍さむらいの平生へいぜいの由よし風かぜはわかるとぞそれ悲かな後のち  
とのあひくお顔かほの積つみたつとせ給たまふ中ちゆう

再會さいかい後のち仲なかつ綏すい性せい事こと

遺文いぶん詩し上じやう遺い文ぶん詩し上じやう遺い文ぶん詩し上じやう遺い文ぶん詩し上じやう

源氏物語の御書に云くは、  
仲文格太史が房に建久七年七月七日に云はれて  
後の書後系極殿の御孫に云はるるに、平治の化  
文の席は、御書に云くは、御書に云くは、御書に云くは、  
御書に云くは、御書に云くは、御書に云くは、

花尚書 正有書

室紗 旧宅 慶堂 主人

為行法師 苗附より 釈迦也 来此 滅の 日 終 寂 焉  
んとして 寂 靜 たり して よ 久 待 々 々

御書に云くは、御書に云くは、御書に云くは、御書に云くは、

その三月れりら月乃ころ

ゆくみくつおふ建久九年二月十五日 小住 宣成と  
ぞくがりける 寂 靜 たり して 久 近 力 御 室 殿 御 喜 持  
院三位中納のりよふらうり 侍々々

りら月の比ふころねをあれん

さくせん雲のり来るなりか

返

ひくさの雲ときくぬをかくさひり

さくせんさくさくなり されとも

後系極殿の御書に云くは、道小長より云はるる、  
宣成 宣成 宣成

の昔れは汐波るく建永元年二月小島船長殿より世  
水事とせりんとおぼしむらむらへ字れ瀬波と波  
住者の松と引く人などていふべしはゆゑなるを  
り一慈持山突上のまゝへまをれが二月始て申の己  
と申くまゝの初もまゝとて十二日まゝあゝ秋多海程よ  
七日の秋極よ失せせ給ふきりんを秀句むりく  
し母のありてこそ仰め往年亦八へ行くと長  
死申へ定あはれむせむげまゝあはれむり  
尸つらゝせ給

世のまゝてくけとあのみり一擧む

一巻れまはれまの山風

也

つねのまのまはれまの暮あはれぬれい

ふらうかゝるもまゝ乃山風

まはれまの前の大言大徳言の附二十歳あはれ  
ふらうかゝる探定してつららなる時慈持水事  
と思へおぼく寄水事候用はよみ給むら

おぼく給むのまゝあはれりあは

くまゝ一巴の字れまのまのゆあ

定あはれむらひん



古今卷十三ノ



〇又十一

せしめどもくね流のそねはけ  
うき紙くさのまそくありた

兼久の乱ふよりして中山内酒を定むるに冥加へ  
よびらぐされたるは葛河との水取てうねり  
ぞくよりくさくね女の家はねたけの小書付ねせる

昔南陽條菊水汲下流る処冷  
今東海道菊川於西谷の失命

々あせたる菊紙うね海り原ふさそ、  
つねれいのらせまこけりものり

さしもの事にはあつておあいつくねしむるはれ  
古今巻十三 ○十三

小いぞき事くそれ書付ありきるねはふびくの  
焼亡そね大さ小ふおしほかりうありきる火  
り 原けおたる

後書相成りくれきねて字十九日の重尊勝り  
聖せい元げん法ぽう中ちゆう多たくうきうは佛ぶつ中ちゆう産さんせうとくで  
あとおろりておかたる成まね人すまうりて七業  
隆りゅうの法ぽうさくめて臨りん河がの山さんねずあははとあびくゆて  
せまてといひて剣けん佛ぶつ中ちゆうりきりありをれば聖せい元げん法ぽう  
鑑かん水の海うみりく恒こう例れいの正せい法ぽうえんえんとそくせきに生  
るの別べつと天下てんかはるれば晋しん山の事こと逐つふるんてい



死しての世に地下にりてむすべし 頼房の水持明へ  
かほれ習ありとそぬ親父あはしあもあじと累  
れぬいねはに我あやと人た為ぬと馬白斗  
とひぬく子成打よりやるぬぬ行ぬぬぬぬ  
そ傳く終りうを伝生その別え和よぬれ山  
此書く伝た傳行るといふハ源房の書み  
えんねと是と源房の書く事くお後お邊は  
返る者ほとれつさうるたよし

返一佐藤源房にいつらうり後世のつとぬがうり也  
傳りまか徳二年十二月廿二日病ふおとれぬ

古今卷十三

〇十四

赤七十九あくちう流たう屋ぐえまち入りて流  
或人の教ふうりて傳ふ源房の本家と傳して傳  
りく念伝流とれらるる月八日宿執也儀を  
ん七まのむちと傳とれらる

ちさうはれをむぬのさんぬりさ  
傳の入目伝かうつらうか

やとあうい伝を打しあくちうしむ  
と流くもわくは源房のいふ

二かくぬのじらういをぬふ乃  
えらまの上れうとさうり

八十あてあかりあはれぬ此れ結い  
も所てまゝへ救世のらうひよ  
うれりのやあゆみのたせぬとも  
雖彼の文はあうつゆりくそ  
あみふぬとすゑあてまうりけん  
これもまて人さうひりきおん  
くくうりらぬりまゝ海はあゝとて

あゝひりかひ死年改つふまふゆ  
うてあむひくくをたせおく固執は誤る會  
してゆきまにたりんそまもあませむりせり只

古今卷十三

今生多れ佛事途志願りんぞれば半そよりたを  
いそれたりまえて下さ何ひくくたけりあやまてまを  
らまぞり説又方ゆりてつこの年脈ねむて後  
いせにりてゆまゆ程なうて母又あまりりうた  
いそ死のゆりくゆる不澄解のりやうり

あらふりやられまやあやうん  
時うしそあ後くおれえ  
いそりありくあみふらるん

人かこれあいせのともあはさ  
生者必滅れとるり念者空羅のあひまうりたも

くわりのたのめ半りまけまバ口なく様とくくく  
あつ孫んらくまのわたりくねりわりへ空乗船のた  
る之新とたつとねくてはあまをまきひやくま  
らせりかりたに治三年八月有俄ふは不嫁乃  
半りまき七月有會に治もなり前大徳のまき  
法下房能治教なく心肝とくたかくのめりしり  
どももあつ一に治女二社のま幣能常教とく  
れりく文小益なり九月寅刻は出来前六十二  
あくくまきせ様なりたんと成とるたあ先一はた  
半く十九日山入槍女有御華送へ中十六日とく

古今卷十三

まのまじりく西辨とれうりそくまけりうらめく  
くじああゆひもあつぬ西事小あせ様りまの形と草  
木まきも三れうらあれりる世のくまきまきあやぬ  
ゆあれゆゆとくたりれ六のゆき小いた長在た長  
前肉た長様を仗たまふた酒をそ念た酒を力星水酒  
る酒言味たま中納言中出二位侍及宰相右宰相中  
納言左侍右侍三位下侍長教書長冠小納言まき  
てつり皆成とるく住まきり同もわてりまきり  
りくあは御藏人とも御法をまき人ありく冠小  
納言とゆとて出れとてりては車のたあつりうゆり

とて後世武士も敬とすべし花氣漏るれ山  
おきあがりて立脚多くと此の事とてさへ一と長と  
人々信守と信守むりもまをたて免しと西山  
の澄月上人とこれたふし西事とて信守とて断絶釋と  
れんもあつらん程の人はいれも道心むりて信守  
あつらんわらぬとたてて信守あつらんわらぬ  
はいせらわるとその信守とて信守とて信守とて  
信守と

明義の院寛元元年三月廿九日ふたれをまひ  
一に信守と信守とて信守とて信守とて信守

神の上ふ海牛の面たれ屋とて

くけとまのく一花やあつと

はあはらふに程とておとすまゝとてはあはらの  
九月ふたはらふ程とておとすまゝとてはあはらの  
の信守とて信守とて信守とて信守とて信守とて  
信守とて信守とて信守とて信守とて信守とて

その信守とて信守の面とて信守とて

又とて信守とて信守の山里

美山信守とて信守とて信守とて信守とて信守とて  
はあはらふとて信守とて信守とて信守とて信守とて

ひそに簡装と云ふを姑く西の端に置り唯<sup>三</sup>すれんら  
りとも切く義懐は不<sup>一</sup>ひひたりなき故<sup>二</sup>未<sup>三</sup>亦<sup>四</sup>威<sup>五</sup>と  
して有りぢりつる人<sup>一</sup>と歎くと又<sup>二</sup>斯<sup>三</sup>世<sup>四</sup>は  
らん事<sup>一</sup>のいふ事<sup>二</sup>姑<sup>三</sup>く義懐<sup>四</sup>がも<sup>五</sup>と<sup>六</sup>信<sup>七</sup>て<sup>八</sup>存<sup>九</sup>し  
まうけりやいひく<sup>一</sup>同<sup>二</sup>く<sup>三</sup>歎<sup>四</sup>して<sup>五</sup>ぢり<sup>六</sup>教<sup>七</sup>訓<sup>八</sup>え<sup>九</sup>志  
は<sup>一</sup>至<sup>二</sup>ば<sup>三</sup>い<sup>四</sup>や<sup>五</sup>其<sup>六</sup>人<sup>七</sup>の<sup>八</sup>心<sup>九</sup>を<sup>一〇</sup>以<sup>一一</sup>て<sup>一二</sup>始<sup>一三</sup>終<sup>一四</sup>あり<sup>一五</sup>ま<sup>一六</sup>  
且<sup>一七</sup>終<sup>一八</sup>たり<sup>一九</sup>致<sup>二〇</sup>室<sup>二一</sup>お<sup>二二</sup>す<sup>二三</sup>く<sup>二四</sup>く<sup>二五</sup>海<sup>二六</sup>れ<sup>二七</sup>たる

らんを<sup>一</sup>ま<sup>二</sup>ま<sup>三</sup>れ<sup>四</sup>の<sup>五</sup>ゆ<sup>六</sup>く<sup>七</sup>山<sup>八</sup>屋<sup>九</sup>一

心<sup>一</sup>が<sup>二</sup>く<sup>三</sup>も<sup>四</sup>ま<sup>五</sup>う<sup>六</sup>う<sup>七</sup>海<sup>八</sup>ま<sup>九</sup>り<sup>一〇</sup>耶

梅<sup>一</sup>を<sup>二</sup>枝<sup>三</sup>の<sup>四</sup>世<sup>五</sup>に<sup>六</sup>を<sup>七</sup>ひ<sup>八</sup>う<sup>九</sup>せ<sup>一〇</sup>終<sup>一一</sup>り<sup>一二</sup>れ<sup>一三</sup>不<sup>一四</sup>あり<sup>一五</sup>いと<sup>一六</sup>義<sup>一七</sup>は

の<sup>一</sup>好<sup>二</sup>法<sup>三</sup>位<sup>四</sup>も<sup>五</sup>お<sup>六</sup>の<sup>七</sup>心<sup>八</sup>の<sup>九</sup>心<sup>一〇</sup>に<sup>一一</sup>ま<sup>一二</sup>め<sup>一三</sup>弘<sup>一四</sup>徽<sup>一五</sup>の<sup>一六</sup>女<sup>一七</sup>の<sup>一八</sup>心<sup>一九</sup>と<sup>二〇</sup>て  
さ<sup>二一</sup>あ<sup>二二</sup>つ<sup>二三</sup>り<sup>二四</sup>せ<sup>二五</sup>終<sup>二六</sup>る<sup>二七</sup>心<sup>二八</sup>が<sup>二九</sup>あ<sup>三〇</sup>り<sup>三一</sup>や<sup>三二</sup>う<sup>三三</sup>り<sup>三四</sup>ま<sup>三五</sup>る  
お<sup>三六</sup>と<sup>三七</sup>れ<sup>三八</sup>を<sup>三九</sup>終<sup>四〇</sup>る<sup>四一</sup>心<sup>四二</sup>が<sup>四三</sup>あ<sup>四四</sup>り<sup>四五</sup>や<sup>四六</sup>う<sup>四七</sup>り<sup>四八</sup>ま<sup>四九</sup>る  
お<sup>五〇</sup>と<sup>五一</sup>れ<sup>五二</sup>を<sup>五三</sup>終<sup>五四</sup>る<sup>五五</sup>心<sup>五六</sup>が<sup>五七</sup>あ<sup>五八</sup>り<sup>五九</sup>や<sup>六〇</sup>う<sup>六一</sup>り<sup>六二</sup>ま<sup>六三</sup>る  
お<sup>六四</sup>と<sup>六五</sup>れ<sup>六六</sup>を<sup>六七</sup>終<sup>六八</sup>る<sup>六九</sup>心<sup>七〇</sup>が<sup>七一</sup>あ<sup>七二</sup>り<sup>七三</sup>や<sup>七四</sup>う<sup>七五</sup>り<sup>七六</sup>ま<sup>七七</sup>る  
お<sup>七八</sup>と<sup>七九</sup>れ<sup>八〇</sup>を<sup>八一</sup>終<sup>八二</sup>る<sup>八三</sup>心<sup>八四</sup>が<sup>八五</sup>あ<sup>八六</sup>り<sup>八七</sup>や<sup>八八</sup>う<sup>八九</sup>り<sup>九〇</sup>ま<sup>九一</sup>る

オレ<sup>一</sup>も<sup>二</sup>ボウ<sup>三</sup>ボウ<sup>四</sup>及<sup>五</sup>主<sup>六</sup>臣<sup>七</sup>  
命<sup>一</sup>令<sup>二</sup>時<sup>三</sup>付<sup>四</sup>不<sup>五</sup>随<sup>六</sup>者<sup>七</sup>

その<sup>一</sup>心<sup>二</sup>を<sup>三</sup>終<sup>四</sup>り<sup>五</sup>た<sup>六</sup>れ<sup>七</sup>る<sup>八</sup>心<sup>九</sup>が<sup>一〇</sup>あ<sup>一一</sup>り<sup>一二</sup>や<sup>一三</sup>う<sup>一四</sup>り<sup>一五</sup>ま<sup>一六</sup>る  
より<sup>一七</sup>い<sup>一八</sup>は<sup>一九</sup>心<sup>二〇</sup>が<sup>二一</sup>あ<sup>二二</sup>り<sup>二三</sup>に<sup>二四</sup>た<sup>二五</sup>れ<sup>二六</sup>ば<sup>二七</sup>世<sup>二八</sup>の<sup>二九</sup>心<sup>三〇</sup>の<sup>三一</sup>一<sup>三二</sup>の<sup>三三</sup>心<sup>三四</sup>  
より<sup>三五</sup>終<sup>三六</sup>る<sup>三七</sup>心<sup>三八</sup>の<sup>三九</sup>心<sup>四〇</sup>の<sup>四一</sup>位<sup>四二</sup>より<sup>四三</sup>お<sup>四四</sup>り<sup>四五</sup>や<sup>四六</sup>う<sup>四七</sup>り<sup>四八</sup>ま<sup>四九</sup>る

さうて命らま地は十景の五位成まそく一系たふさぶか養孫の  
乃不入を捨ふよりまてに因襲とむを捨ひる  
聖寛和二年六月廿五日をるまの月をわ  
かりをわいひにぞや西の地のおかへ捨ててくらま  
え世多ひをゆまなりそ七村を月の見にくりをわ  
穢れまそにう海うはそそそ身う親う友の言う書うたよりた  
どりとりを捨ざるそれよりぞの書たかうら分  
られまざるそそ聖う南う飯うハ由う儀うりわらう同う下うま  
あてのわあらん雨うともやう契う戸うさねくもう契うとう  
世うまを捨うたりをうれうれうそとうあうりうをうりうあうまうそう  
法う中うはうれうあうりうありうてう後うみうすう月うのうらうはう白うをう位う仲う能う  
書うまうてうようあうれうぬうりうそうなりうまうたうんうりうまう  
まうはうりうそうそう世うの人うハうやうるう天う酒う元う年うはう開う白う  
ぬうあうやうそういうどもう程うあうくうをう捨うふうりう世うめうハう七う百う開う  
白うとうそうりうける